

# 未来志向の 日伯協力に向けて



海外投融資情報財団  
理事長  
森田 嘉彦

国際協力銀行（JBIC）に勤務していた40年強、ブラジルとのご縁の中で積み重ねてきた思い出は個人的にも大きな財産となっている。

最初の出張は1982年。マイアミから深夜のベレンに到着。翌朝、ホテルのカーテンを開けアマゾン川の河口を目の前にしたときの感激は忘れられない。当時は資源開発融資を担当しており、現在でも代表的な日伯協力プロジェクトとされているウジミナス製鉄所、セニブラ紙パルプ工場や建設途上にあったアマゾンアルミ工場、カラジャス鉄鉱山などを見せていただいた。

本誌にも寄稿いただいたエリエゼル・バチスタ氏と最初にお会いしたのもこの時であった。当時バチスタ氏はリオドセ社会長ではなかったかと思う。リオドセ側の真ん中に座り、会議をとり仕切っておられた。一方、小生は日本輸出入銀行（現・国際協力銀行）ミッションの最若手担当で、JBICサイドの

末端でメモ書きにいそしんでいた。その後25年を経て、移民100年を前にして2007年に設置された日伯賢人会の日本側メンバーに加えていただいたが、ブラジル側の座長はバチスタ氏。「昔のバックベンチャーが前面に出てきたな」とからかわれたものだ。

1980年代のブラジルは、60年代後半から70年代初期にかけての「ブラジルの奇跡」といわれた時代はすでに過ぎ、後に「失われた10年」と呼ばれる債務危機とハイパーインフレの時代に入っていた。

戦後の中南米経済の歩みはポピュリズムの歴史といわれる。経済的ポピュリズムのもとでは政府は市民の要求を受け入れ、財源の確保を考えるとなく大きな約束を行い、国全体の富の将来を深く考えようとしない。この時期のブラジルも多かれ少なかれこうした傾向のもとで数年ごとに経済は極端な振幅を繰り返していた。1950年代から70年代にかけてブラジルに進出した前記の日伯協力プロジェクトも多くの苦労・困難に直面し、関係者の努力でこうした時代を乗り越えてこられたのだと思う。心から敬意を表したい。

1980年代は主としてブラジル側の経済状況、90年代は日本側の状況を背景に日伯間の経済交流は停滞することとなった。本年10月15日、ブラジル国立経済社会開発銀行（BNDES）とJBICとの交流50周年を記念するセミナーが開催されたが、日本からの輸出促進、ブラジルにおける中小企業育成や輸出・インフラ促進などを目的としたJBIC・BNDES間の金融協力が、80年代、90年代の日伯関係が全体的に停滞するなかで、両国間経済関係の維持に果たした役割は大きかったと思う。



2011年3月、IDBカルガリー総会において、JBIC、BNDESとの間で地球環境保全に資する貸付契約に調印  
右から、ベルキオール予算企画管理大臣、  
コウチャーニョBNDES総裁

私自身はしばらく機会がないまま次にブラジルを訪れたのは20年後の2002年5月、カルドゾ大統領が退任し、ルーラが選ばれることとなる大統領選挙の直前であった。この20年の間に「ブラジルは変わった」というのが強烈な印象であった。その背景として最大の要因はいうまでもなくカルドゾ大統領のもとで90年代半ばから実施されたレアルプラン（経済安定化政策）の成果であっただろう。

何が変わったのか。考えてみればそれは国に対する信頼感、将来に対する安心感ではなかったかと思う。市場メカニズムが機能しはじめ、人々も企業も将来を予測し長期的な視点で行動できるようになった。カルドゾを継いだルーラ大統領は選挙前の言動から国際社会の懸念を招いたが、前政権の政策を基本的に継承し、現実的な政治経済手腕を発揮して国際的な信頼を勝ち得ていった。ブラジルは今やBRICsそしてG20の一員である。世界経済が停滞するなかでブラジル政府も難しい経済運営が求められている時期ではあるが、ルセーフ大統領のもとでもマクロ経済の安定と投資環境の改善に向けての基本路線が継承されていくことを期待したい。

2008年の日本からのブラジル移民100年を前にして設置された日伯賢人会の日本側のメンバーに加えていただいた。日伯それぞれ4～5人のメンバーで日本側は三村明夫座長（現・新日鐵住金株式会社 取締役相談役）、ブラジル側はバチスタ座長であった。会議は今後の日伯協力の有望分野として、①農業・食料、②インフラ・情報通信、③資源・エネルギー、④環境・省エネルギー・気候変動——の4分野をあげ、当時の安倍総理、ルーラ大統領に提言を行った。

その後世界経済はリーマン・ショック、欧州経済危機などを経て、今なお曇天状態が続いている。日本経済、ブラジル経済もその例外ではない。しかし、未来に向かって持続的な世界経済の健全な発展を考えていくとき、先にあげた4つの分野の重要性は失われていないと思う。こうした分野で日伯両国がそれぞれの持ち味を活かし、未来志向で日伯協力を深化・拡大させていくことを期待したい。また、こうした日伯協力は両国間のみならずサステナブルな世界を築いていくうえで世界全体に貢献していくことにもつながると確信している。



2007年5月、サンパウロにおける日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議。左から、森田嘉彦氏（国際協力銀行副総裁）、ロベルト・ロドリゲス氏（前農務大臣）、渡辺捷昭氏（トヨタ自動車（株）代表取締役社長）、カルロス・マリアーニ・ビテンクール氏（ブラジル石油化学工業連盟会長）、エリエゼル・バチスタ・ダ・シルヴァ氏（リオドセ社特別顧問）、三村明夫氏（新日本製鐵（株）代表取締役社長）、槍田松瑩氏（三井物産（株）代表取締役社長）、故リナルド・カンボス・ソアレス氏（ウジミナス社社長）（所属・役職は当時のもの）

\*この場を借りて、故ソアレス氏に哀悼の意を捧げます。